



## 序詞

考査前なので、前号に続き今回も勉強のお話。「伊勢物語」で簡単に触れた「序詞」。それに関する面白い解説があるので、引用してみよう。

\*

多摩川にさらす手作りさらさらに何ぞこの子のここだかなしき（「万葉集」巻14）  
（訳＝多摩川でさらす手織りの布…さらさらさらに、どうしてこの子がこんなにも愛おしくてたまらないのか）

「万葉集」の巻十四には、「東歌」といって、東国風の歌が集められています。その中に出て来る武蔵国の歌です。「多摩川」は現在東京都南西部を流れている多摩川です。そこで布を晒す手作業が序詞に歌われ、「さらす」と「さらさらに」という同音の繰り返しで＜思いの文脈＞に乗り換えていく形になっています。

この歌の場合は、「多摩川でさらす手作り布のように、さらさらさら…」と訳してみても、どういう意味なのかよくわからないでしょう。このように、音の繰り返しで転換する序詞の場合、「さらす手織り布、その「さら」ではないが、さらさらさら…」などと訳されたりしますが、そう訳してみても、この序詞の持つ働きは全く表すことができません。現代語訳というのは便宜でしかないのです。それでは、この歌の序詞、＜景物の文脈＞はどのような働きを持つのでしょうか。

当時、布を晒す作業は女性の仕事でしたから、この、＜景物の文脈＞は、多摩川で布晒しをする女性の像を呼び起こします。そして「さらさらさら」という言葉の持つ音感は、おそらく布晒しの清らか水音をも感じさせる働

きがあるでしょう。また、布を冷水に晒すのは、より白く仕上げるためですから、晒したての真っ白な布の清らかなイメージも伴っているでしょう。「手作り」という語からは、布を織って晒す女性の美しい白い手も連想されるかもしれません。そのようないろいろな残像を残しつつ、「どうしてこの子がこんなにも愛しいのか」という＜思いの文脈＞が出て来ることになるのです。こうなると、もう現代語訳でその働きを表すのは無理です。序詞という技法は、現代語訳できるような一面的な働きを超えて、さまざまなイメージのふくらみを＜思いの文脈＞に重ねる効果をもっているのです。（渡部泰明編『和歌のルール』笠間書院、2014）

\*

途中、＜景物の文脈＞＜思いの文脈＞という表現が出て来るが、「唐衣～」の歌で勉強した「イメージの系列」「意味の系列」に対応しそうだということは、何となく分かるのでなからうか。つまり、歌に歌われている思い＝＜思いの文脈＞を導き出すために、その前に、その思いとは一見関係がないようにみえる事物＝＜景物の文脈＞が置かれるわけだが、そのことによって、何の具体性もない「思い」に、具体的なイメージを与えるものが「序詞」であるということになる。

多摩川の歌の例では、その＜景物の文脈＞の働きが具体的に解説されている。「多摩川にさらす」からイメージされる「女性→水音→真っ白な布→白い手」の連想が、愛おしい女性のイメージを鮮明に浮かび上がらせるといふわけだ。ご納得いただけたらだろうか。